「戦争にまつわる体験談」

和田孝三　82歳

太平洋戦争において、私が実際に経験したことを記憶に頼って話してみます。

1945年8月15日（敗戦日）以前の幼少期において鮮明に覚えているのが、真夏の夜半にサイレンがけたたましく鳴りわたり、敵機来襲との空襲警報で家族（母、兄、弟）共々近くの仮防空壕に避難していた時の長かったこと、暗闇の中「云い知れない恐ろしさ」と暑さで　警報解除後に家に戻りついても、 まんじりもしなかった事が思い出されます。 ちなみに大阪近郊に住んでいたので　直接の被害はありませんでした。

戦後になっての少年期において、食い盛りの餓鬼にとって「ひもじさ」の辛さは、まさに筆舌に尽くせぬものがありました。この思いは、我々の世代はみんな持っていたと思います。

敗戦後すぐに道路の横、堤防の空地という空地が、畑となり大根　馬鈴薯　サツマイモ等々を自作して、絶対的に不足している「配給」を補う努力をしたものです。

就学前ですが、鎌を持ち鍬を握ってほんのわずか、汗を流したものです。街頭に立って母親と一緒にサツマイモの葉・茎を売ったこともありました。このようなことは、当時の少年少女にとって多少の差があってもあたりまえのことだった思います。

上級学校に進みさらに社会人になっても、戦争の「悲惨さ・反人道さ」を色々学び、

さらに、わずかながらの体験を礎にして、人の道に反する戦争を絶対に起こさない世の中にならなければならないと痛切に感じました。また、その思いを微力ですが、一人一人に地道に伝えていきたいと思います。

これが戦争に巻き込まれた我々の責務だと思念している次第です。